

ブルー・アイランド氏が やりたかったこと

第7回 写譜屋

作曲家が書いた楽譜は、そのまま演奏に使われるわけではない。ただ例外はあって、編成が小さい時、——ピアノ独奏や歌曲など——は、書いたものをそのまま見ることはある。ただし、走り書きではなく、舞台である程度離れて見ても判読できる音符の大きさ、という条件を満たしていればのことだが。

特にオーケストラやアンサンブルの場合は、作曲家

は全部のパートをそろえた「総譜(スコア)」を書く。大きなものでは、市販の五線紙で60段というのがあり、これは60パートに分かれているわけだ。指揮者はこれを見ながら指揮をするのだが、何よりも譜めくりが大変で、数十秒に一度はめぐることになる。指揮者は片手が空いているのでまだ何とかなるが、演奏者は両手がふさがっているから不可能だ。そのため自分の楽器の部分だけを抜き書きした「パート譜」を使う。これを書き取るのが「写譜屋」という職業なのである。

まずきれいに音符が書けなくては務まらないのは言うまでもない。また音楽の基礎的な知識がなくては読み難い手書きの総譜を判読することはできない。楽器によっては「移調」という面倒な作業を必要とするもの(クラリネット、ホルン、サクソフォン)があり、これは専門に勉強しなければならない。

また、割の付け——めくりやすいように休符の箇所を右ページを終える——などの気配りも必要だ。そして期限までに必ずそれを仕上げるという時間配分も重要で、急ぎの場合は数人で分担することもある。上記したのは手書きの場合で、現在はコンピュータも用いられるようになって、状況は変わっているようだ。

17歳で初めて当時最高の教師だった池内友次郎先生のレッスンを受けた時、B(ブルー・アイランド＝青島)の楽譜をご覧になって一言、「写譜屋になれるね」とおっしゃった。よく意味がわからなかったが、何にせよなれるものがあるのは良いことだと思ったから「はい」と言っておいた。が同室に居たT中という大阪の生徒があざ笑った。他人の楽譜を写すだけの卑しい作業だということである。そのくせ彼もまた、写譜屋については正確には知らなかったはずだ。

Bはプロの写譜屋にはなれなかったが、先生の予言は当たり、大学の試験の課題などはそのまま使っていたに違いない。最も費用がかかるので出版を敬遠されているオペラの練習用の楽譜も、Bに限ってはそのまま「ブルー」の出版してしまっているのだ。



文と絵 青島広志

1955年東京生まれ。東京藝術大学および大学院修士課程(作曲)を首席で修了。作曲した作品は「火の鳥」などのオペラや、「マザー・グースの歌」などの合唱曲など200曲を超える。ピアニスト、指揮者としての活動も40年を超え、コンサートやイベントのプロデュース、書籍、イラスト執筆もこなしている。「題名のない音楽会」や「世界一受けたい授業」などに出演。東京藝術大学講師。洗足音楽大学客員教授。よみうりカルチャー荻窪で「名アリアの歌い方」の講師を務める。日本現代音楽協会、作曲家協議会、東京室内歌劇場会員。

写真提供: Gakken Pub